眼に映る世界_スタンリー・カヴェル_2021/04/04_難波優輝

映画とは何か？

2 Sights and Sounds 視覚と音

- パノフスキーとバザンの映画論：映画のメディウムの基盤が写真的で写真は現実の写真である。では、「スクリーンに投射され上映されることで、現実というものに何が起こるのか」
- 映画を思い出すことから考えると、夢や記憶のように映画は人を包み込み覚醒させる。
- 映画は現実を通じて幻想的なものも描ける。映画は絵画じゃない。
- 写真は事物そのものを映すというのはよくわからないし類似でもないが、対象について、「それらを取り巻く魔術のオーラや物語」は共有している。
    - 音声との比較
    - 音声はそこにないものもアクセスできるが、視覚はそうでもない。（おもしろい）
- 「ここにこの写真があるとはどういうことか」（物体としての写真がもたらす経験と、写真の描写機能の持つ微妙な絡まりについてカヴェルは論じたそう）
- 音は（理想的には）完全に複製できる。だが、写真とその物体は音とその録音とは異なる関係にある。写真はその物体を（理想的にも）完全に複製できない。「物体が（いわば）なす長めを複製するには、物体そのものを複製しなければならない」
    - 複製論、
    - 音の場合：出来事 — 音 —> 聴覚
    - 視覚の場合：物体 — 眺め —> 視覚
    - 光の配置ごとまったく同じ仕方で発光するものを記録できたら「眺め」を再現できることになる？ な
    - センス・データが与えられ解釈される？ たかだ
    - 写真がセンスデータ（劣化はしても）保存説を批判できてはいなさそう。たかだ
- 写真は機械による生産。
- 「写真が造形芸術（絵画）を類似への強迫観念から開放した」のではなく、逆だという。マネは現実に対する類似の強迫観念ゆえに類似を諦めるよう強いられた？ 絵画は現実と結びつきたいと思っていたが、その幻影は果たされなかったので類似を捨てた。
    - バザンの「解放説」への批判が重要。物自体へとアクセスできないというオブセッションはずっとあるよ。
    - Aという強迫観念ゆえにAを諦めるよう強いられた。というのは便利すぎる気もする。「すなわち、優柔不断な男性主人公に対して女性が優位なライトノベルを読み漁るオタクたちは、男性性を求める強迫観念ゆえに男性性を断念するように強いられているのだ」「—つまり、女性の存在しないBL作品を読み漁る女性たちは女性性を求める強迫観念ゆえに女性性を断念するように強いられているのである」。困ったときに無限に使えそうなフレーズ。
- 写真が絵画に与えた影響への批判（ほんとかな？）
- 類似説からの絵画の離反は、現実との結びつきを新しく作り出すことになるかも。
- 絵画が求めていたのは「現前性」のようなもの。世界が直接現前してはおられず、そこに入り込んでしまった主観とどう付き合うか。表現主義の例。
    - 現前性：そこに直接（主観を介さずに）何かがある感。
    - むしろより抽象的に、何かが現れている感がカヴェル的現前性。世界からわたしたちへの現前、世界へのわたしたちの現前のどちらもある。
- ロマン主義は「表象とわたしたちの主観性の認知との間の生来の闘争」。
- 写真は自動性によって主観性を克服した。

        - 世界が機械に現前しているのを撮影できてる、という気持ち
    - 「絵画は世界の退場を受け入れる。写真は世界に対するわれわれの不在を受け入れることによって世界の現前性を維持する」
    - 過去：素朴認識論→今：世界をわれわれが捉えているよ（印象派ライン）
    - 写真にはわれわれが不在～写真の物体性
        - 難波説：写真は世界と自律的な関係を結んでおり、わたしたちにはアクセスできないのだ！

3 Photograph and Screen 写真とスクリーン

- 絵画で描かれているものの背後になにもない。写真は世界を切り取っている。
- 不明：「スクリーン＝フレームは鋳型であり、型である」。どういうこと
- 不明：フレームがどれだけの大きさの物体を映せるかについて。
    - 小ささの限界は技術の限界であり、大きさの限界は世界の限界だ……。せん
    - 統語論的空間と意味論的空間の思い出し。二つの空間は別れてるよという話をしている たかだ
    - 実在論的空間–統語論的-意味論的 の三空間をカヴェルが考えてる せん

4 Audience, Actor, and Star 観客、俳優、スター

- 俳優の前に観客はいない（演劇との相違？）
- 演劇との違い
- 「生身の人間はいないが、人間のようなものがおり」
- 演劇と映画の違いを役者から考える……パノフスキー「映画の登場人物は俳優とともに行き、俳優とともに死ぬ」（このフレーズを2018年頭に読んで「バーチャルYouTuberじゃん！」と気づいたことを思い出した。）
- 役と俳優の関係を考えよう
- 演劇の役：スポーツのポジション
- 映画の役：パフォーマーである演者の身体的・性格的な長所を探し、役にフィットするものだけを使う。その他、俳優と映画パフォーマーの違い。
    - スター性は濃淡があるけど、演劇とは基本的に違っているよ。極端に映画的なものがスターになっているよ たかだ
- 「スター」のみが特別な映画のパフォーマーとしてタイプを創り出せる。もり
- 映画のパフォーマーの想像は、登場人物の創造——ある種の実在人物がそうであるような種類の：類型的人物（タイプ）
    - 演劇は再演系クラシック、映画はポップスっぽいやつ な
    - 映画の方が実際の出来事の記録っぽくみえるから、役者と役の関係が近くみえる。キャッツがだめだったのは、演劇の約束事感を映画につっこんでしまったのだ たかだ
    - 制度・慣習に由来するものかも せん
    - 言葉の十徳ナイフ化はやめるべき な
    - 『ハーバード式 自分の使っている十徳ナイフに操られるな！』

5 Types; Cycles as Genres 類型的人物、シリーズ、ジャンル

- 一般の問題から、映画のメディウムが歴史上でとってきた個々の具体的な形式やジャンルに注目。
- パノフスキーとバザン：大衆芸能・民俗芸能。ではなぜこれらが借用されているのか？ハウザーの答えはイマイチ。パノフスキーの誤解を招く問題提起。「文学的価値を人為的に注入することによってではなく、この新しいメディアだけに特有の可能性を開発すれば発展できる」
- 映画メディアのパノフスキーによる特徴「空間の活性化と時間の空間化」、動きと時間の自由な移動。問いは「何がこうした特性を「メディウムの可能性」にしているのかを理解できない」

- 映画の特性をどう使うか（カヴェルの順番の説明がわからない）
- メディウムの美的可能性は所与ではなく、芸術家たちが開発していくものですよ。有益な芸術批評は作品について考えていて、メディウムを考えることは作品について考えなければできないので、批評はメディウムを考えることになるよ。
- パノフスキーにとって、「固定したイコノグラフィー」は映画を理解するための基本的な要素として必要だったけど、観客が筋書きを理解できるようになると廃棄されていくと言う。カヴェルはそれを否定。「映画は変化を遂げてきたが……受け入れることができないからである」というのは、類型的人物の機能は残存しているけど、類型的人物に付与される性格とかが変化してきたということ？
- 映画は諸々の個性を想像する。新しい類型的人物を創造することで。
- 黒人の例：使用人、家来、芸人に限定。
- 映画と演劇の類型的人物の一般的違い：表現される社会的役割に個性は先行。
    - 映画はどんどんキャラクタを世界に登録できていくよ↔演劇は時の社会的役割をトップダウンに再生するもの
    - なぜ人気をうむのか、ポピュリズムな個性をひろいあげる たかだ
    - 構築的・行為論的な映画ゆえに民主的なのだ せん
        - 「原節子はダメな抑圧的類型を創り出しているのだ」を説明できる せん
        - 「いや、原節子は戦後民主主義の類型的人物なのだ！」たかだ
    - マイノリティのレプレゼンテーション論とも共通しそう な
- スターの力：個性への映画の要求を満たせる個人、ふるまいと気質が発揮されている個人。我々自身の特異性の発見を可能にする。
    - 歌舞伎でもスターの力の話はある。映画と演劇の媒体特性というより、慣習の話し。もり
- シリーズは商業主義の問題というよりメディウムの可能性だよ
- 類型的人物の枝分かれ
- 偉大な喜劇役者の独立性。映画のメディウムの二つの必然性が類型の創造において発揮拡張：
- （1）映画俳優は投射するのではなく、投射される。
    - 中の人の性格などが役にフューチャーする系の話し たかだ
    - ↔貴族向けやかしこまった絵画のポートレートとは違うよ、という話かも なんば
- （2）写真は人間を物体に優越させず、後者を前者の協力者・敵対者としてフラットに描く。
    - 映画は自然なふるまいを引き出せるよ↔演劇の小道具はあらかじめ使用が定められていたりするよ、の対比かな なんば

6 Ideas of Origin 起源についての諸説

- パノフスキー：新たな芸術の発生は芸術的衝動ではなく技術刷新だよ。科学的衝動が何かを考える必要が生まれる。
- バザン、観念が技術に先行するよ
- 「完全映画の神話」。芸術の諸神話。
- 映画の神話的満足方法、自動的、魔術的。
- すぐれた映画ほど、映画の霊感源との接触を保っている（ほんとかな？）
- 映画は世界を魔術的に再生：観られないまま世界を見ることを可能にしてくれることで